

80歳男性が右眼の充血と眼痛を訴え受診。右眼耳側を中心とした強膜炎を認めステロイド薬の点眼・眼軟膏・結膜下注射を施行するも改善せず、強膜の結節性病変が1か月以内に急速に増大したため3月10日に診断・治療目的に外科的切除を施行。T-SPOT 検査陽性であり結核の可能性が考えられたが病理組織検査および培養検査で結核感染は証明できず、確定診断には至らなかった。術後1か月で上皮化は完了し強膜炎は著明に改善した。局所治療への反応が乏しく、ステロイド薬の全身投与が困難な結節性強膜炎に対しては外科的治療を検討する価値があると思われた。

33. 経過中に眼内に隆起性病変を生じた、慢性関節リウマチに伴った強膜炎の一例

○小林崇俊¹⁾、高井七重¹⁾、多田 玲¹⁾²⁾、庄田裕美¹⁾、丸山耕一¹⁾³⁾、竹田清子¹⁾、岡本貴子¹⁾、池田恒彦¹⁾、尾崎拓郎⁴⁾

1)大阪医科大学

2)多田眼科(池田市)

3)川添丸山眼科(高槻市)

4)大阪医科大学リウマチ膠原病内科

【緒言】強膜炎の経過中に眼内に隆起性病変が生じることは比較的少ない。

【症例】66歳女性。両眼に充血が生じて近医を受診。右眼に硝子体混濁が生じ、精査加療目的で当院を受診した。既往歴として30歳時に慢性関節リウマチを発病、ステロイドと免疫抑制剤を10年以上内服している。ステロイドの点眼回数を増やすも強膜充血は改善せず、ステロイドの内服を増量し、強膜充血、硝子体混濁とも改善した。漸減途中、再度右眼の強膜充血が悪化。眼内に白色の隆起性病変を認めた。再度ステロイドの内服を増量し、隆起性病変は縮小、平坦化した。

【考察】今回の病変は、一連の経過から、強膜炎に併発して眼内に生じた結節性病変と考えてい

る。

34. Vogt-小柳-原田病における前眼部 OCT での毛様体脈絡膜剥離の検討

○永田健児¹⁾、北澤耕司¹⁾、関山有紀¹⁾、中井浩子²⁾、出口英人³⁾、外園千恵¹⁾

1)京都府立医科大学

2)京都市立病院(京都市)

3)バプテスト眼科山崎クリニック(京都市)

【目的】Vogt-小柳-原田病患者において前眼部 OCT で毛様体剥離の有無を検討した。

【方法】対象は原田病の連続症例15例30眼。11例が初発、4例が再発例であった。CASIAを用いて、耳側・鼻側の毛様体を撮影した。

【結果】15例中14例(93.3%)、30眼中25眼(83.3%)で毛様体剥離を認めた。初発例では11例中10例(90.9%)、22眼中19眼(86.4%)で、再発例では4例中4例(100%)、8眼中6眼(75.0%)で毛様体剥離を認めた。

【結論】超音波生体顕微鏡による報告と比べて、前眼部 OCT では高率に毛様体剥離を認めた。初発時の診断および治療後の再発の有無の判定に有用であると考えられた。

35. 濾過胞の抜糸が原因と考えられた角膜感染の一例

○今村 拓、南川貴之、一山悠介、大路正人
滋賀医科大学

【緒言】濾過手術後の縫合糸の抜糸を契機とした角膜感染症を経験したので報告する。

【症例】48歳男性。2015年12月4日近医において左眼の濾過胞の縫合糸を抜糸された後、眼脂、充血、眼痛が生じ近医を再受診。当院紹介となった。当院初診時、結膜充血、上方角膜混濁、細胞浸潤、前房蓄膿を認めた。濾過胞感染の疑いで入院とし、抗菌薬の硝子体内注射、頻回点眼を開始したが、症状の改善はなかった。角膜感染の